

「なるほど、未整理の蓄積と財界の収縮化とが、ますます對立をハッキリし出すからですね」
「さうです。私の恐れて居るのは、そこなんです。況や、今や、當に、全世界は、工業資本主義の確立に餘念なく、企業の整理は、ますます、進歩しつゝあるに於てをやです」
「どうして、日本だけが、特に、企業の整理が出来ないのでしようか」

日本で特に整理の業難い譯

「一つは、日本の企業者が、資本主義經濟の根本原理に眼覚めないからでしょう。米國あたりの企業者になると、これは良くない、と思つたら、ドシ／＼自ら進んで、破産を申請するさうですね。日本の企業者と來たら、前後を見ずに、遺縁をやり、政府の救助にすがらうとするんだから、駄目だ。資本主義は、そんな生緩いことではやつて行けるものではないのですからね」

「それはさうです」

「それから、モウ一つは、日本では、政府が、諸會社に向つて、整理を促進されるやうな態度

を、實際に、採らぬから駄目なんです。早い話が、日本の政府は、諸會社に向つて、整理を叫びながら、而も、時々、救済してやつても、良いやうな態度を示すものだからして、諸會社としても、整理をして痛い目を見るよりは、何とかして、政府の救済にすがらうとするんじゃないのですか」

「なるほど、それもさうですね」

「殊に、日本では、諸會社の整理に、最も必要な企業金融制度の確立を計らないからして、整理しようと思ひ乍ら、整理し得ないことにもなるんです」

「近頃では、興業銀行を利用して、さう云つたことをやり始めたやうではありませんか」

「然し、あんな小規模な、一時遁れのことでは駄目ですよ。モット、金融制度全體の改善に依つて、徹底的にやる必要がある」

「なるほど」

「何れにしても、今日のまゝでは、財政の収縮に反して、企業の未整理は、いよく、蓄積するからして、今に、一大混亂が起らぬとも限りません。全く以て、日本の企業ほど、借金が

多く、固定資本の多いものも少いのですからね」

「なるほど」

「實際、これからは、借金と固定資本が多く、殊に、借金で固定資本を支へて居るやうな企業は、全然、行詰るものと見なくてはなりません」

「何故ですか」

「物價が安くなり、従て、原價が低下して、急速力を以て舊式な固定資本の否定作用が行はれるからです。詰り、固定資本の新陳代謝が激しくなるからです」

「さうすると、どうしても、日本の企業界は、(一)借金の整理をやり、(二)固定資本の削減をやらねばならぬのでしょね」

「さうです。所謂、徹底した減資運動ですね。そして、減資しても追いつかないものは、早く、解散するに限るんです。何と云つたつて、日本ばかりでなく、全世界的に、財界に收縮化の傾向を辿つて居るのですからして、夫れに對抗し得るやうに、徹底した整理をやつて、企業界全體として、借金と固定資本の重壓を一掃する必要が、大いに、あるではありませんか」

「そこを、何とか、出来ませんか」

日本財界窮極の運命

「どうにも出来ません。資本主義制度を採用して居る以上、どうにも、出来ないのです。日本人は、何かと云ふと、財界の收縮化を中止して、借金や固定資本の整理をしないで済むやうにしたいものだ、など、蟲のよいことを考へたり、叫んだり、訴へたりしますけれども、今日となつて、日本だけが、財界の收縮化を中止するつて云ふ譯には行かないですからね。だからして、結局する處は、財界收縮化は、絶対的の事實であつて、借金と固定資本の整理が、それに従はされる時期が来るんですよ。この必然性を無視して、依然として、整理を回避し、未整理を多くする企業者達は實に、氣の毒なものです。私は、さうした企業者諸君にも申し上げます。資本主義の、世界的に行詰つて、收縮化の傾向を辿りつゝある今日では、整理をしないでも、済むやうな都合な状態は、絶対に、出てくるものではないのですからして、皆さんは、早く、思ひ切つて、企業の整理を斷行なさらないとね」

「と云つた處で、駄目でしょう」

「私も、實は、駄目だ、と思ふのです。だから、私は、自然の経過を待つ外ないのです」

「では、結局する處、パニックですか」

「その外ありませんまい」

「さうでしょうか」

「さうです。と云ふのはですね。固定資本の評価を引下げるのには、夫を支へて居る借金からして返済してゆかねばなりません。さて、借金を返す力は、絶対にないのだからして、借金を負けて貰ふか、政府からでも救済資金を貰ふかせねばならぬが、さて、救済資金などは、中、出ないからして、結局する處は、借金をまけて貰はねばならぬ。それには、株主に迷惑をかけるか、銀行に迷惑をかけるか、何れかの途を選ばねばなりません。即ち、減資してから更に、増資をするか、然らずんば、自から破産を發表するかであります。處が、企業者の身になつて見ると、そんなことは、ボロを出すことになるからして、やりたくないのが人情です。だからして、結局、企業者は、整理を、出来るだけ回避しようとするのであつて、それに、無理

はありますまい」

「それはさうですね」

「だからして、結局する處、恐慌に依つて、整理が強要されるまでは、企業にしても財界にしても、共に、整理を回避するんです。そして、長期金融の途でも出来て、整理回避や恐慌回避がうまく行くと、當分は、財界も浮び上ることになるが、結局は、夫も、一時的でありまして、間もなく、また、固定資本の過大と、借金の壓迫の前に、財界、並に、企業界は身動の出来ない處の自己を見出すことになるのであります」

「なるほど、では、目下は、どう云ふ状態にあるのですか」

目 先 觀 如 何

「今日の状態は、政府の恐慌回避策の擡頭を、豫想して、目茶苦茶な突込賣の反動が、商品市況の反動高を背景として、株界に出現した、と云ふ状態でありますからして、結局は、恐慌回避策見越相場時代とでも云ふのでしよう」

「なるほど」

「従て、また、將來、恐慌回避策が實際に行れる時には、再び、恐慌回避策實施相場なるものが幾分とも出るかも知れません。と云ふのは、已に一言しましたやうに、今迄の株安は主として、固定資本見積の過大と、借金の壓迫との大であつた處へ、單名手形や社債の行詰りからして、長期金融が不圓滑になり、従て、また、固定資本の過大や、借金の壓迫が、ハッキリとして來たに依るものだからして、政府が腰を据ゑて、企業金融を何とかしてやると、案外、企業界も見直して來るからであります」

「なるほど。さうすると、あなたの御意見からすると、何ですな。財界は、當分、大した悲觀は無用ですか」

「目先からすると、企業金融がうまく行く限り、財界は、必ずしも、悲觀を要しません。乍然、企業金融を徹底的に改善するには、現在の預金銀行の淘汰集中が行はれる必要がありますからして、企業金融だつて、吾々の考へるほど、完全なるを得ないでしょう。寧ろ、特殊の銀行をば、企業救済の爲めに虐使することになるので、その結果は、銀行界の空氣が、再び、危惡

にならねばよいが、と思ひます」

「なるほど」

「政府は、恐らく、銀行制度を徹底的に改善して、企業金融に當らうとしないで、却つて、現在の預金銀行や、現在の特殊銀行を利用して、企業金融に當らうとするでしょうから、その祟りが、どこかに現れるに相違ない、と思ひます。さうでなくても、企業界は、借金を踏み倒すことに依て、整理しなければならぬ状態にあるんですからね」

「なるほど」

「ですからして、企業界を、政府が、金融的に支へるならば、金融界の方が惡化して來て、その點からして、問題が起りはせぬかと考へますよ」

『さうでしょうね』

「殊に、日本などでは、預金銀行の数が多すぎるに於てをやです」

日本の預金銀行の前途

「預金銀行の数は多くてはいけないのですか」

「いけません。預金銀行制度を採用して居る英國では、五大銀行と云つて、預金銀行の数は五つしかない。之が、預金銀行制度の當然の歸結です。従て、日本でも、銀行集中の運動は、更に、繼續されて、大財閥の手に、銀行業が掌握されるに至らねばならぬのです」

「なるほど」

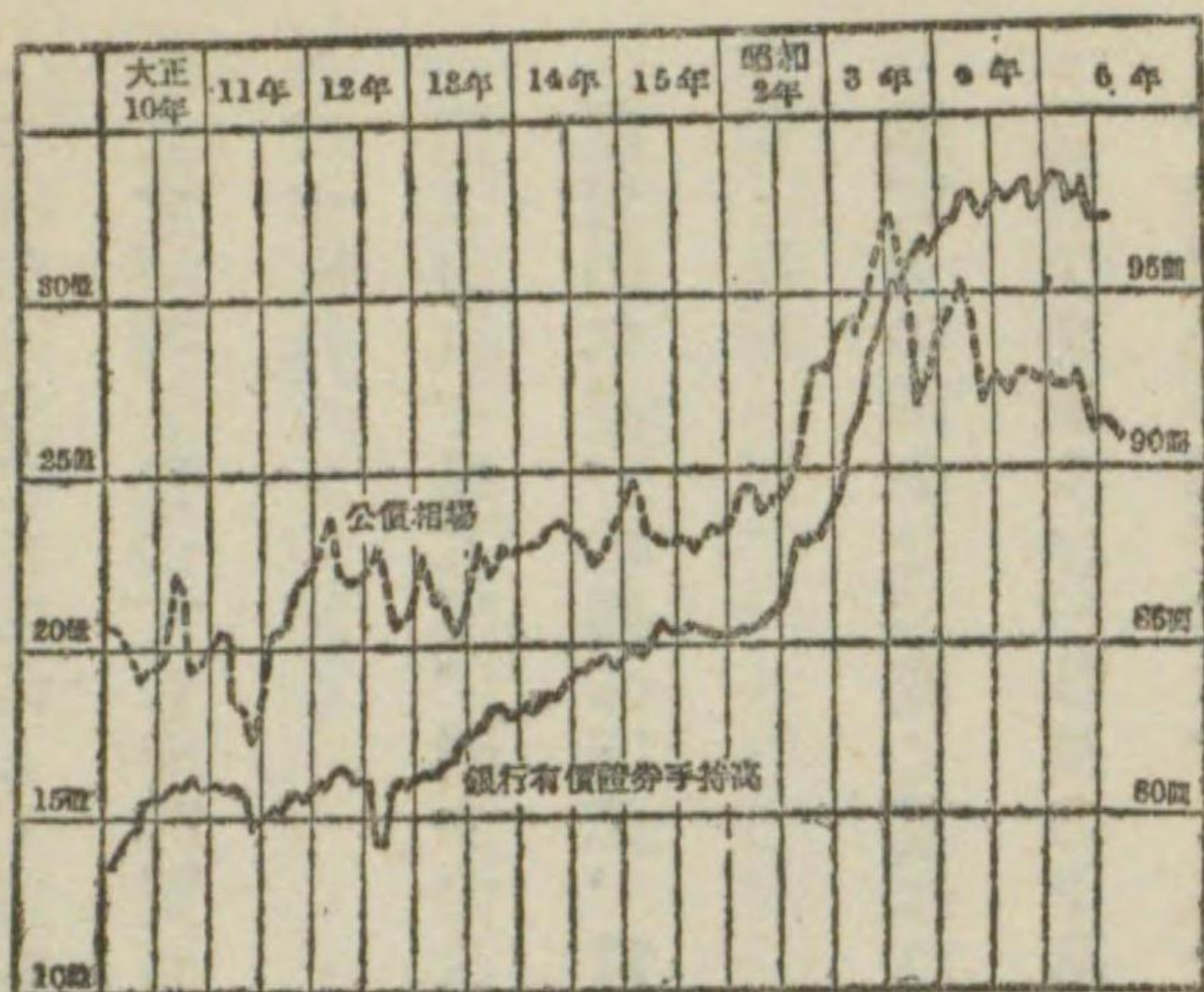
「況んや、財界の收縮化傾向を辿る際には、企業者の借金踏倒からして、弱體銀行の淘汰を中心に、銀行集中の行はれるのが、預金銀行當然の運命なんですからね」

「なるほど」

「殊に、銀行界の性質として、弱體銀行が出来て、銀行界に斑點を生ずるに至れば、どうしても、その斑點を一掃して了はぬと、氣の濟まないのが、信用を主とする預金銀行の常ですからね。定期預金に對する不信認傾向から見ても、夫は分るではありませんか」

「では、株界も、結局は、悲觀ですな」

「恐慌回避策實施相場が出た跡は、再び、大悲觀時代に這入るのでしよう。蓋し、恐慌回避策



の實施に依つて、只さへ悪い銀行状態が、更に、悪くなる上に、茲に掲げた圖表に於て見る如く、銀行は高値で證券を買込んで手持して居るから、その高値で買込んだ銀行の手持證券の處分が出るからです」

「銀行状態は、一體、どうなんですか」

「銀行状態のことに關しては、積極的に申上けることは出来ません。只、近頃では、ムラが大變に多くなつて來たことを一言し得るのです。且つ、銀行としては、(一)固定貸付が多くなり、(二)流動預金が少くなるのは、状態の變化せる左證なりと知る可きのみです」

「然し、恐慌回避策見越か何か知りませぬが、近頃のように、諸株が反撥してくると云ふと、いよゝゝ、財界も、悪く

なるだけ悪くなつて、底を入れたのではないか、と云ふ氣がして來ますね」

財界は底を入れたか

「さう云う氣になるのも、尤もですが、要するに、夫は、場況に囚はれた見方に過ぎないと思ひます。何と云つても、購買力が減少するからして、企業界は、更に、壓迫を蒙むるに至るからです」

「購買力は、果して、減少するでしょうか」

「農村の不振、物價の下落、富の減少等から見て、購買力は、當然、減少するものと思ひますね」

「購買力の減少は、既に現はれて了つたのではないのでしょうか」

「購買力の減少は、物價の下落や、富の減少や、農村の不振に、可成り遅れるものですからして、我國民の購買力は、これから、更に、減少するでしょう」

「政府が、救済をして、金をフリ撒くとしたら、どうでしょうか」

「政府が、金をフリ撒いても、そのフリ撒かれる金は、購買力を發揮するやうな階級の手には

這入らぬのですからして、購買力は増加しないでしょう。況んや、斯んなに、不景氣な時代に於てをやです」

「なるほど」

「殊に、已に、一言しましたやうに、固定資本の見積は、過當であるし、借金の壓迫は大きいに於てをやです。結局、企業が整理され、購買力が増加する時代にならなければ、景氣は、絶對に、回復し得ないものとする可きのみです」

「では、今回の株界好化も、一時的のものなのですね」

「一時的のものなのです。然し、今迄、随分、續いて、悪化して來た後ではあるし、且つ企業によると統制力の充實して來たものもありますからして、政府が、長期金融の方面で腰を入れるとすれば、案外、好化は大きいかも知れません」

「統制力の出來た事業と云ふのは、何んな事業でしょうか」

「セメントや、紙などは、その一例でしょう」

「なるほど。さうすると日本財界の地位は依然として悲觀せざるを得ない譯ですね」

「勿論です。しかし、恐慌が來たら株は買ひです」

「どうしてですか」

「今度の恐慌は陰の極としての恐慌だからですよ。現に昭和二年の恐慌も、陰の極としての恐慌だったからして、株價は、それから、少時、騰貴したぢアありませんか。大正九年の恐慌の如く、非常な好景氣の後に、陽の極として來た恐慌にあつては、恐慌の後に株は下るのであります。従て、恐慌と同時に、株を賣らなければなりません。昭和二年の恐慌でも分るやうに、大不景氣が來て、その後陰の極として、恐慌が來た場合には、株は必ず上りますから、恐慌來と同時に、株を買はなければなりませんね」

「何故、陰の極としての恐慌の際には、株は上るのですか」

「それはですね。陰の極としての恐慌後には必ず大救濟が行はれるとか、新平價が實施されるとかして、財界は空景氣に似た状態を呈さうとするからですよ、詮り陰の極は陽であつて陰極れば陽の外ないと云ふ自然の理法に基くものなのです」

「悪材料の出盡し、と云つたやうな意味もあるんですね」

「それもありませんが、結局は、陰極れば、正反對の現象を示さざれば財界自體が存在を失つて了ふからなんですよ」

種類別に見た株價の動靜

「さういふ時には取引所株等はどういふことになるんでせう」

「詮り、取引所株、例へば、新東の様なもの、今日、割合に頑強で下らないのは、所謂、人氣株の常であつて、諸株下落の息抜煙突となつて居るからです。だから、今度、恐慌にでもなつたら、その時こそは、この息抜煙突たる新東が、先づ、慘落して、諸株は底を突くでせうね。然し、諸株が底を突いて、反騰して來ると云ふと、再び、新東も騰貴し始めませうが、今度は却つて、鐘紡のやうな一流工業株の方が、却つて、騰貴率はあざやかでせう」

放資家の態度

「なるほど。すると、結局は、まア、株は恐慌まで賣りで、恐慌が來たら、買ひ、と云ふ譯で

すね」

「大體さうです。然し、これからは賣つても、それほど下りませんし、時々賣込の反動高がやつて来て、充分氣が持てませんから、餘程勇氣のある方でないと、賣れませんよ。だから恐慌の來るまでは、ジツと見送つて居る方が得策でせう」

「何故、これからは、下り難いのですか」

「かう安くなつて來ると株式所有が分散されて現株が仲々出廻らず結局空賣りが目立つてくるからですね。それに政府にしても恐慌回避策のやうなことをやらうとするでせうからね」

「株の方は、それで、大體、判つたやうな氣がしますが、次に、然らば、商品界はどんなでせうか」

商品市場の前途

「商品界は、世界的大不況の影響を最も激しく受けるんだから、餘程、統制組織でも確定しない限り、生絲を始めとして、砂糖にせよ、綿絲にせよ、肥料にせよ、製粉にせよ、仲々、底入は困難でせう」

「なるほど」

「一體、日本の實業家は、こゝまで叩き付けられても、未だ、世界的大不景氣の事實に眼が醒めないのだから困りますよ。モウ、そろそろ、今にどうにかなるだらう、などと云ふ、その日暮しの考へを改めて現實を直視してほしいものですね。少く共、此大不景氣の科學的認識に達してほしいものです」

不景氣の科學的研究を要す

「要するに、吾々としても大いに、問題なのは、今日の大不景氣が、果して、資本主義の缺陷に基く不景氣なのか、それとも、資本主義の矛盾に基く不景氣なのか、と云ふ點なのです。この點は、ハッキリしなければ、今回の大不景氣に對する對策は樹てられない筈であるのに、世の實業家連中は、斯うした不景氣に對する科學的認識に觸れないで、徒らに、銘々の小さな立場から勝手な觀察をして、我田引水論を振廻して居るので、甚だ困るのです」

「なるほど。日本の實業家は、商人タイプであつて、小さな立場に立つて、財界を見るからし

て、ほんとうの財界批判と云ふことが出来なくなるんですね。財界の嚴正批判は、須らく、全
的な立場に立たなければ出来るものでないのにも不拘、小さな立場に立つて、財界の批評をや
つた積りで居るものだから、不知不識の間に、我田引水論に陥つて了ふのですね。だからして、
不景氣の真相も、ハッキリ、分らず、不景氣の對策も、完全なるを得ない譯なのです
「さうですよ。全く、その通りです。だから、私は、全的な立場からして、財界の嚴正批判を
行ひ、不景氣の真相を確めた上でなければ、不景氣の對策もハッキリせず、財界の前途がどう
なるかも分らないんだ、と云ふんです」

不景氣の原因如何

「その點はよく分りましたが、問題は、あなたの云はれた、例の「缺陷か矛盾か」の一言です
ね。一體、今日の大不景氣は、資本主義の缺陷から原因したものであるか、資本主義の矛盾が
ら原因したものであるか。どつちなのでせう」

「私は缺陷説です」

「一體、缺陷と矛盾とは、どう違ふんですか、矛盾も缺陷の一種ぢやないのですか」

「一體、私の用語が拙かつたんですね。私の意味する處からと云ふと、缺陷とは、相對的な矛
盾であり、矛盾とは、絶對的な缺陷なんです。だから結局する處はですね。今日の我が不景氣
は資本主義の相對的矛盾に原因して居るのか、それとも、資本主義の絶對的矛盾に原因して居
るのか、と云ふことが、私にとつては、大問題だ、と云ふ譯なんです」

「ぢや、その點はどうですか」

「已に一言したやうに、私は相對説の方ですよ。現在の不景氣は資本主義の相對的矛盾に原因
したものだと思ふんです」

資本主義行詰の理論如何

「資本主義の相對的矛盾とは何ですか」

「夫は、不均衡と不統制とです。資本主義の絶對的矛盾と云ふのは、不均衡と不統制とを克服
する力が、資本主義になくなつて了つた場合なんです、資本主義に、まだ、不均衡と不統制

とを克服する餘裕のある場合には、それは、資本主義の相對的矛盾に外ならないのです」

「なるほど。では、克服し得る處の不均衡・不統制は相對的矛盾であり、克服し得ない處の不均衡・不統制は絶對的矛盾なんですね」

「さうです。當に、その通りです」

「ぢア、克服し得る不均衡・不統制と、克服し得ぬ不均衡・不統制とは、どう云ふ違ひを有するんでせう」

「それ自體に於ては、何等、違ひはありません。その違ひは、資本主義の克服力如何にあります。従て、克服力の大きな根強い資本主義にあつては、相對的矛盾であるものも、克服力の小なる弱い資本主義にとつては、絶對的矛盾たらざるを得ぬのであります」

「ぢア、資本主義の行詰り如何は、理論的問題ぢアなくて、現實的問題だ、と云ふことになりませんか」

「勿論です。そこが、ハッキリ分れば、占めたものです。社會主義理論は、理論としては正しいが、現實論とすると、不正確となる理由も、そこにあるんですね。詮り、社會主義學者達は、

可なり、創造力に富む生物としての資本主義をば、餘りに硬直した融通の利かない機體として見過ぎたんです。そして、不均衡や不統制の如き資本主義の矛盾が直ちに、資本主義を破壊に導くものなり、と輕斷し、資本主義の崩壊は資本主義の矛盾からは生じないで、その矛盾を克服する力の不足からのみ生ずるものだ、と云ふことを看過した。彼等の間違は、實に、そこから起るのです」

「いやよく分りました。それでは、一ツ、具體問題に這入つて、その不均衡なり、不統制なりの内容に就て御話し下さい」

「よろしい。お話ししませう」

「どうか」

世界的不均衡の由來

「凡そ、今日、世界的に、一大不景氣が襲來しつゝある。夫は、不景氣と云ふよりも、恐慌と云つた方が、遙かに、適當な位であります。所謂、世界恐慌とでも云へませうね。從來と

も、社会主義者は、よく、かうしたことを主張したものでありまして、世人の多くは、夫は、社会主義學者の概念的遊戯だ位るに思つて居たんですが、近頃では、仲々、どうして、概念的遊戯どころではないことが分つて來たのであります。即ち、世界恐慌は、徐々として、具體化しつゝあります。然らば、その原因如何、と申しますると、その一ツは、已に一言したあの『不均衡』なのです」

「なるほど、不均衡發生の原因は」

「それは、要するに、歐洲大戰なんですね。歐洲大戰の結果として、歐洲大陸は債務國となり、貧乏國となつて了つた。その爲めに、歐洲大陸の購買力、消費力は大幅な減少なのです。處がそれに引きかへて、北米大陸の方は、歐洲大戰で、大金を儲けて、一躍、大債權國となり、大富裕國となつたのです。處が、斯くて、米國に流入したる世界の富は、株式市場を通じて、企業界に侵入し、企業の新設擴張を促進して、所謂生産設備の量を激増せしめたのです。單に、量ばかりでなく、質の向上をも來したのです。米國の産業設備は、量に於て増加したのみならず、質に於ても、高級化し、能率化したのです。そこで、米國では、安くて良い商品の雨を、世界

各國に向つて降らざるを得なくなつた。その爲めに、たださへ富の偏在で困つて居た地球は、更に、富の偏在の程度を加へざるを得ざるに至つたのです。處が、富の偏在は、また、購買力の偏在を來します。遂に、購買力は、米國國民の獨占物のやうになつて了つた。そこで、米國では、歐洲に向つて、商品の雨を降らすことを斷念して、自國內に向つて、商品の雨を降らすことに努力した。月賦販賣制度の促進や、生産設備高級化運動（産業合理化運動）や、勞銀率の引上げ運動などは、さうした努力の現れに過ぎなかつたのです。ぢア、その結果はどうか、と云ひますと、結局に於て（一）富の世界的偏在と、（二）米國の生産設備過多と、（三）生産設備の短命化とを來すに至つたのであります。斯くて、購買力の不足と、生産設備の過剰とは、相依相助けて、世界財界のバランスを不均衡にし、世界財界の活動力を鈍らせるに至つたのであります」

治療策なし

「ぢア、財界バランスの不均衡を、何とかして、早く、直すやうにしたらどうですか。一體、

どうしたら、夫は、直せるんですか。名案でもありますか」

「一寸ありませんね」

「債権の棒引なんかどうです」

「そんなことが出来るやうなら、問題はないんですがね。元來、この資本主義の世の中は、損得計算をハッキリし、金銭を正確にすることが原則になつて居るんだから、一寸出来さうに見えるが、仲々以て、債権の棒引なんか、出来るものぢありません。兎に角、資本主義經濟の中心生命は、財界バランスなんだから、その財界バランスが變んになつたら、仲々、直す方法がないのです。だからこそ、財界バランスの不均衡をば、資本主義の一大缺陷に數へもするんですからね」

「然し、をかしの話ですね。歐洲戰爭で、債権と富が米國に偏在し、米國の生産設備が、量に於て、過剰し、質に於て、向上し、時期に於て、短命になつた爲めに、世界的バランスが不圓滑になり、經濟活動が沈滞して來たなんてね」

「をかしくつたつて仕方がありませんよ。さう云ふ處が、資本主義經濟の特色なんだもの」

「なるほどね。損得計算が資本主義の本質をなすんだから、バランスが重要な意義を持ち、その不圓滑が、資本主義の重荷になるのも、當然なことですね」

「だから、結局バランスの不均衡と云ふことが、資本主義の一大缺陷となり、世界恐慌の原因をなして居るのも、當然なことではありませんか」

工業資本主義と統制化の必要

「左様、その點は、大體分ります。では、次に、不統制が、何故に、資本主義の缺陷であり、世界恐慌の原因をなすんですか」

「それはですね。資本主義が、まだ、商業資本主義時代であつて、派動資本が極めて多く、固定資本が甚だ少く、且つ、また、流動資本が本位をなし、固定資本が附隨的である場合には、自由放任で、若し、方針が間違つたら、すぐに、直すことも出来るからして、別に、問題は無いが、工業資本主義時代になつて來ると云ふと、固定資本の分量は、流動資本の分量に比して大變に多くなり、且つ、固定資本が主になつて、流動資本が従となるからして、勢ひ、方針が

間違つたからつて、早速、改める譯に行かなくなりませぬ。殊に、相互に、無暗に、競争などをすると、固定資本の濫設をし、固定資本の生命を短くするやうなことが起りもするのです。従つて、工業資本主義に、勢ひ、計画的で協力的で行く必要が起つて参ります。處が、斯うした計画的傾向や協力的傾向をば促進するには、統制が必要であつて、若し、統制がなくなると、工業資本主義は、どうしても、生産過剰とか、設備過多等を來し、その發達を阻止されざるを得ませぬ。そして、その爲めに、恐慌現象を來し、過剰設備に相當する金額をば、財界バランスの上から切落す必要に迫られます」

「なるほど」

「だからして、不統制と云ふことは、固定資本が増大し、その意義の重大せる今日に於ては、財界不景氣の原因をなしざるを得ないのでありますが、不幸にして近頃では、世界的に、實業家、並に、政府の財界統制力は鈍つて來たのであります。それは何故か、と申しますと、それには三ツの理由があります。一は、財界の範圍が擴大され、財界の内容が複雑化した爲めでありませぬ。二は、固定資本の分量が、破格に大きくなつて來た爲めでありませぬ。三は、無政府的傾向が、

世界經濟化の前に、ますく、ハッキリして來たことです。斯うした、三個の原因からして、統制の力が弱つて來たので、世界恐慌が、自からに、用意され出したのであります」

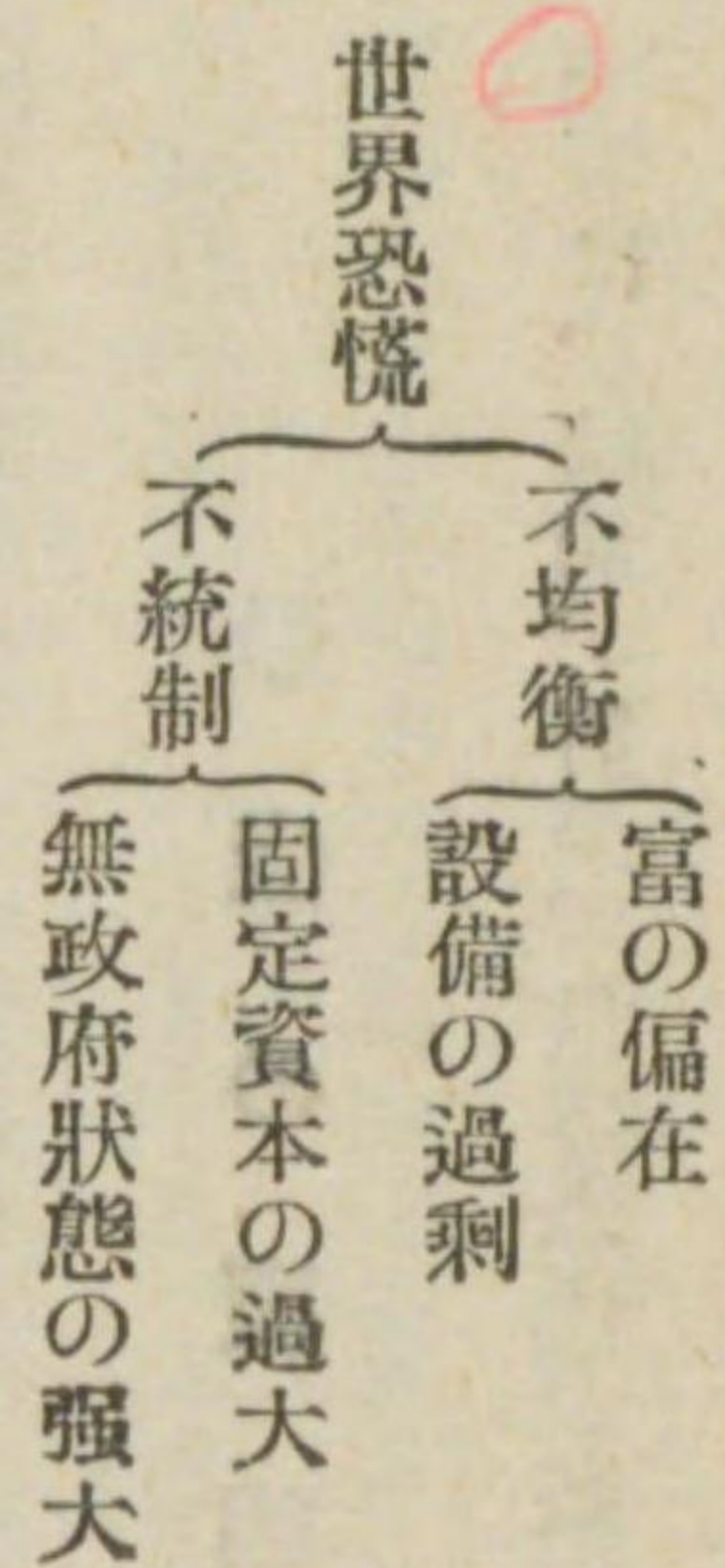
「なるほど、さうすると、工業資本主義は統制を必要とするのに、統制が出來難いので、勢ひ、不均衡の事實と相待つて、世界恐慌は促進されるに至つた、と云ふ譯なんですね」

「さうです。それに、また、工業資本主義は、統制を必要とするにも不拘、根が、資本主義であり、利益計算のやかましい處で、各人、みな、自己の小さな立場から、自利を主張してゆづらないので、無政府状態は、ますく、ひどくなり、必要とする統制がますく、出來難くなる、と云ふ處にこそ、資本主義の一大難關は見出されるのであります」

恐慌の原因

「では、結局、將來、世界恐慌が甚しくなつて來るものとすれば、夫は、即ち、不均衡と不統制との事實に基くものであつて、不均衡は、富の偏在、設備の過剰に原因し、不統制は、固定資本の増大、無政府状態の事實に原因するものと、見る事が出來るのでせぬ」

「さうです。だから、夫を表記すると



右の如くなる譯です」

「では、さうした世界恐慌に對する對策としても、不均衡と不統制との一掃が必要ですね」

恐慌の作用と意義

「さうです。均衡化と統制化とに依てのみ、恐慌は一掃される譯です」

「では、夫は可能なことですか」

「處が、夫は、仲々、可能でないのです」

「その譯は」

「要するに、資本主義の本質が、夫を許さんからです。他言すると、資本主義は、損益計算をハッキリさせることを主とする處であつて、従て、各個が悉く自分の利害を中心として動かうとし、決して、財界全體の立場などを考へて、その爲めに、自己の利益を犠牲にしようなどと云ふことをしないからです。詮り、無政府的であり、部分的だからですよ。だからして、一度、不均衡を來すと、不統制はますます、大きくなつて、財界バランスは、いよ／＼、ゴタ／＼し、遂には、恐慌にまで進まざるを得ぬのであります」

「恐慌が來たら、どうなりませう。恐慌が來たら、財界は破壊の外ないでしょうね」

「さう考へるから間違ふのですよ」

「と云ふ譯は」

「蓋し、恐慌こそは、財界バランスの混亂を一掃する唯一の途だからです。社會主義學者などは、恐慌をば、大變に悪いものの如くに考へますが、恐慌は、資本主義財界を、行詰から救ひ出す天與の方策なんですからね」

「さうでしょうか」

「慥かに、さうです。恐慌は、部分を犠牲に供して、全體を救ふ天與の道なんです。元來、資本主義財界は、己に申上げた如く、無政府的な處であつて、各人が、自己の立場を守つて、全體の爲めに行動しないので、財界バランスが悪くなつても、それを淨化することが出来ないのです。そこで、恐慌と云ふ財界全體の利益の爲めに、部分的利益を犠牲にする現象が起つて來て、人爲で出来ない財界整理をば、人爲に代つて實行せしめる。と云ふ譯なんです」

「なるほど」

「だから、恐慌つて云ふものは、決して、そんなに恐ろしいものぢやないんです。恐慌は、人に代つて、財界の不統制不均衡を一掃し、財界バランスを淨化しようとする運動に外ならないのですからね」

「ぢや、恐慌は必ずしも、資本主義を破壊する譯のものでもないのですね」

「勿論です。恐慌は、資本主義の缺陷を、人に代つて、一掃し、資本主義をば喰延ばさせようとする資本主義的運動の一ツに外ならんのですからね」

「なるほど」

「處が、さうした恐慌をすら恐れる。そこに、資本主義自體の缺陷があるんです。また、恐慌を無暗に回避する處に、資本主義を破壊する原因が作られるんです」

「では、恐慌は、回避す可きものではないのですね」

「勿論ですとも。恐慌は、決して、回避す可きものではありません。世人は、時に、恐慌對策として、財界の均衡化、財界の統制化を以てしますけれども、實際上は、寧ろ、その正反對であります、恐慌が來てこそ、財界の均衡化、財界の統制化は可能となるんではないのですか」

「なるほど。さうすると、恐慌對策として、均衡化だの統制化だのを主張するのは、馬鹿化たことなんですね」

「勿論です。蓋し、資本主義財界では、無政府的であり、利己的であつて、全體の立場を、各個が採らないから、それで、財界の不均衡が大となり、財界の不統制が大となつて、ますます、財界は混亂して來るんですからね。そして、恐慌に依つて、始めて、それが一掃されるんです」

からね。だからして、不均衡を直すのは、恐慌です、不統制を一掃するのも、恐慌だ、と云ふことになるんですよ」

「では、日本も、世界も、共に、斯う、財界バランスが不均衡になり、財界に統制がなくなつて来ると云ふと、結局は、恐慌の外はない、と云ふことにもなるのですか」

「そこです。だからして、私は、世界恐慌の事實をば、否定しないのです。故に、また、私は国際商品の方面に對しても、悲觀せざるを得ぬのであります」

「なるほど」 「世人は、以上の如き恐慌以來の理を覺らないからして、商品市價を、トモすれば樂觀するんですが、私は世界的に恐慌は用意されつゝあつて、恐慌が来なくては、不均衡と不統制も一掃されず、従て、また、財界の立直りも出来難いと信するが故に、茲に、世界商品に對しても、悲觀的態度を採らざるを得んのです」

「然し、この上、更に、恐慌が来るなんてことになつたら、全く大變なことですな」

「またしても、恐慌を恐れますね。恐慌は、個人としては恐ろしいものかも知れぬが、財界全體から見ると、救済主であつて、少しも、恐ろしいものでないことを、何故、お知りにならぬの

ですか」

「さア、さう云はれるとさうでしょうが……」

「よく、聞いて下さい。恐慌と云ふものをば、資本主義の敵であるかの如く宣傳したのは、社會主義者の罪なんですからね。資本主義は、恐慌に依つて、活路を得るところすれ、決して恐慌に依つては、資本主義は破壊されるやうに見えるが、その實は、資本主義自體が、恐慌と云ふ外科手術に耐へるだけの體力がなくなつた、ために、資本主義が、恐慌に依て、倒れることになつて過ぎんですからね」

「なるほど。大體、恐慌と財界の關係に就てはよく分りましたよ。従て、また、國際商品の市場も前途、樂觀に値しないことも、推測に難くない譯ですが、次に、更に、具體的に、日本の財界そのものに就ての御説明を願ひたいものですな」

「そこですね。日本の財界は、歐米の財界よりも、重患状態にあるでせう。たゞ、藥の力や酒の力で、表面、元氣よく見せてゐるだけであつて、實際、醫者がメスを當て、見たら、案外、患部の深大なのに驚くの外なし、と云つた状態ですよ」

「なるほど」

「實際、日本財界の患部は深大なんだ。それを知らずに、メスを當てようとした。そこに、井上準之助氏の考へ違ひがあつた、と云へば云へましようね」

日本財界の三大缺陷

- (1) 原料不足
- (2) 従来、放漫遺線政策
- (3) 口民生産程の高位

「一體、日本の財界が、そんなに、重患だ、と云ふことは、如何なる理由から云へるんですか」

「根本的に云ふと、三つになりますね」

「三つとは？」

(1)「一つは、原料の不足と云ふことですよ。一體、日本の財界は、世界の財界に比較して、山と海の部分が多くて、工業原料に不足して居ることは慥かな事實ですからね」

「なるほど」

「獨逸邊りでは、『原料の缺乏せる國は、それだけ、經濟的に貧弱なんだから、景氣の平準も、

低くし、國民の生活程度をも下位に置かねばならぬ。米國の様に、原料の豊富な國の景氣平準の生活程度と同じ平準や程度をば、獨逸が採用することは、獨逸財界衰弱の原因をなすものだ』とすら云はれて居る程なんですからね」

「なるほど」

「だからして、原料の缺乏して居ることは、何と云つても、一國財界にとつては、大變な缺陷なんですよ。それを看過して、國を立て、經濟を爲したところに、日本財界今日の大重患の根因があつたんです」

「なるほど。よろしい。原料の缺乏ですね。ぢア、その次は何ですか」

(2)「次は、日本の財界が、従来、放漫遺線政策でもつて、無暗と甘やかされて育てられたことです」

「次は」

(3)「次は日本人の生活程度が高過ぎると云ふことです」

「ぢア、原料の缺乏と、甘やかされて育てられたこと、生活程度が高過ぎること、の以上三

點こそ、日本財界の重患原因だ、と云はれるんですね」

「さうです。そして、一寸考へたゞけでは、そんなことは、大したこともなささうですが、事實は、その反對であつて、(一)原料缺乏と、(二)温室養育と、(三)生活程度不當の三つは、生産原價の割高を來す極めて有力なる原因でありまして、從て、工業資本主義を確立する上から云ふと、大變に困ることなんであります」

「なるほど」

「處が、今や、世界經濟の大勢から云ひますと、その工業資本主義の必要は、いよく切迫しつつあるのでありますからして、以上の如き生産費の割高を來すやうな事情の存在は、頗る悲觀すべき事實となるのです」

「ぢア、それに對する對策はありませんのですか」

「さやう。對策と云ふべきものがあつたにした處で、すね。夫を實行するに先立つて、財界フランスの淨化を行ふ必要があるからして、從てまたその爲めに、財界恐慌來は避けられますまい」

「然し、恐慌が來たからつて、財界が立直つたり、工業資本主義が確立したりする譯のものではないでしょう」

「勿論、さうは行かない」

「ではどうすればよいのですか」

「まア、恐慌の根本的な機能は淘汰作用であつて、財界の最も悪い部分だけを切斷するにあるんですが、さうした恐慌の後には、勿論、なす可き多くの對策があります。先づ、それには(一)企業家の結合、(二)財閥の改善、(三)金融コンチエルの確立、(四)管理組織の發達促進(五)銀行と取引所の結合化、(六)政府と財界の結合、(七)資本主義濫用の一掃等があります」

「では、さうした諸對策に就ての御説明なり、御意見なりを伺はせて下さいませんか」

日本財界の改善策

「よろしい。先づ、第一の、⁽¹⁾企業家の結合ですが、日本などでは、これは、極めて、必要だと思ふのであります。蓋し、工業主義時代になつて、固定資本の意義並に分量が増大するに至る

ならば、自然、また、自由競争は不利となり、協力團結がその代りをなす可きことは當然なことであります。然るに、日本では、工業資本主義時代の今日に於ても、商業資本主義時代の今日に於ても、商業資本主義時代の氣風が失せないで、固定資本を擁する企業者が、互に競争ばかりやつて居るのです。だからどうも、その結果はよくない。獨逸邊りでは、企業家聯合と云ふものがあつて、一大結合を構成し、共通なる政策を行ひ、一致協同行動を採るので、工業資本主義の確立を期し得るのであります。故に、我國でも、單に、カルテル・トラストの形態のみでなく、大恐慌の一過したる後には、企業家組合と云ふ形に於て、一大團結を形成するの必要があると思ひます。次に、日本で必要なのは、財閥の改善です。日本の財閥には、どうも、統制力がないやうでして、例へば、三井財閥のうちでも、三井銀行と王子製紙とは密接な關係なく、三井合名にしても、夫等を統制して居る、と云ふ譯ではない。従て、一度、不景氣になつて來るといふと、財閥内部に、ゴタ／＼が起つたりして、財閥の生命力が否定されることなきにしもあらずである。故に、財閥たるものは、一個の中心點を有し、夫に依つて、合理的に統制され、全體化される必要があります。獨逸では、さうなつて居る。また、工業

資本主義の發達に伴つて、さうならなければならぬものです。だからして、日本も、將來は、統制化されたる財閥を來すことにならねばならぬのであります。次に、金融コンチエールンであります。が、之は多くの、中工業を組織化し統制化する一方法として、極めて、必要な方策でありまして、之は、例へば、セメント界にセメント銀行を設立して、このセメント銀行をして、セメント各會社の株式を買収せしめ、セメント銀行をば、セメント各社の共通最高重役たらしめ、そのセメント銀行を通じて、セメント界の統制をなさしめるんです。何故に、斯くの如く銀行機關などを利用して、統制化を行ふのか、と申しまするに、蓋し、それではなくては、金錢的利害を中心とする資本主義經濟の今日では、到底意見を同一化し、意志を拘束することが出來ないからです。そこで、セメント銀行に習つて、紡績界に紡績銀行を作り、肥料界に肥料銀行を作り、機業界に機業銀行を作ると云ふことに致しますれば、中工業にせよ、大工業にせよ、大いに統制化されて、工業資本主義時代に適合することになるであらませう。

「なるほど」

「次に、生糸工業の如く、マユと云ふ手工業的産物を基礎とするものにあつては、その手工業

を、そのまゝに、資本主義的工業に攝取せんが爲めに、先づ、一個の特權會社が、農家から、年、一定の市價を定めて、マユを買入れ、製絲から輸出に至るまでを、一手に獨占せしむ可きである。蓋し、斯くすれば、統制が完全になるからして、生産制限にしても、市價決定にしても、意のまゝに出来ることになり生糸の原價を主張し得るに至るからです」

「なるほど」

「元來、日本では、今迄、生産統制をしないで置いて、市場統制ばかりやつたので、無効となつたのでありますから、若しも、今後、企業統制を行つたと思つたならば、須らく、先づ、以上の如き金融コンチェルン、又は、特權會社的手段に訴へて、生産統制を實行しなければならぬと思ひます」

「なるほど、生産統制の必要はありませんね。然し日本では、元來、各事業會社に、それ／＼特殊の事情や特殊の缺陷があつて、所謂デコボコして居るから、生産統制をやるのが困難です。金融コンチェルンを作らうたつて、仲々、作れない」

「だからして、私は、先づパニックを出して、そのデコボコを一掃せよ、と云ふんですよ。そ

れと同時に、^中管理組織の發達を促進する必要がある、と思ふのです」

「と云ふのは」

「詰り資本主義經濟を指導し、監督するやうな特別な機關なり、設備なり組織なり、を作るんですね」

「例へばどんなのですか」

「例へば、景氣研究所を作つて、景氣變動の上から、財界を指導したり、經濟政策研究所を作つて經濟政策の上で財界を指導したり、世界經濟研究所を作つて、世界經濟場裡に於ける自國國民經濟の地歩對策を明かにしたり、經營研究所を作つて、企業經營合理化を計つたり、企業検査局を設けて、蝸配過評その他資本主義經濟の濫用に關する一切の行爲を未然に取締る方法を講じたりすることです」

「それはよいことですが、果して、さうしたことが出来ましようか」

「政府と財界の結合が出来れば、夫は、出来るやうになりますよ。日本の様に、政府が財界の全體と結合し協力しないで、政府が財界の一部分と結託し、腐れ縁を結ぶやうでは、駄目です」

「なるほど」

「それからして、日本で、最も間違つてゐる、と考へられるのは、株式市場を、餘りに、自由に放任しておくことです。これは、株式相場が需給關係のみで決定される商品相場と同じものだ、と云ふ先入觀念のある結果でありませうが、實際上から云つて、株式相場は會社に對する評價の如き、金利、並に、財界に對する前途の見込等の如き抽象觀念によつて人氣的に決定され、而も、鐘紡株なら鐘紡株、東洋株なら東洋株と、一定した名柄の株式數量は、一定して居るんですから、假令、清算取引が發達して居つた處で、どうしても、商品相場の決定の様な譯には行かないのであります。だからして、日本のやうに、さうした抽象觀念に依つて決定され易い株式相場をば、取引所株のやうな人氣株で、リードせしめたら、ますます株式相場は、人氣に依つて、支配されるに至り、高低波瀾を大ならしめるに了るのみで、公正なる相場は失はれざるを得ません。そこで、獨逸で見るやうに、株式を引受ける銀行が、直ちに、取引所のメンバーになつて、金融の力を以て、株價を統制し、會社内容に適當した相場をば株式に保たしめるやうにする必要があるのであります」

「なるほど」

「要するに、以上述べたやうに、統制化を行はねば、工業資本主義の確立は困難であり、日本財界の發達、また、困難であります。その統制化を實行するには、先づ以て、現在の不均衡を一掃しなければならぬのであります。それには、財界の整理が必要であります。だからして、私は、何と云つても、前途、日本には、整理恐慌勃發の必要あり、と考へるのであります」

恐慌來の經路

「では、それは、どう云ふ形で、日本に起つて來るんでしようか」

「左様、先づ、正貨が更に流出して、金利が騰貴し來り、公社債市價が下落することに依て、しよう」

「なるほど」

「世人は、公社債市價の下落をば、大して問題にしないやうですが、實際上、之は、非常に、問題となるんです。と云ふのは、公社債市價が下落しますと云ふと、只さへ期末決算の困難な

る銀行は、いよく、以て、期末決算の困難を來し、緩漫なる預金の取付につれて、遂には、交換尻で足を出すことになるかも知れないからです」

「なるほど。さうですかね」

「ごらんなさい。銀行の手持有價證券の大半は、公社債ぢやありませんか、然るに、社債は、社債制度濫用の事實が明かになつたので、買手が少くなつたし、公債も、今迄の人爲的釣上策の曝露で前途が怪しくなつて來たんですから、この様子で参りますると、正貨流出金利騰貴とでもなつたら、全く、以て、眼が當てられません。今迄は、何う云つても、低金利で財界は息をついて居たんですからね」

金利騰貴とその悪影響

「ぢや、金利を引上げないやうにしたらいゝでしょう」

「それも、恐慌回避策としては、一考に價しますけれども、困ることには、さうした恐慌回避策が、愈々、採れなくなつて來たのです。他言すれば、金利を、いつまでも、低利に置くと云

ふことが、漸次、出來なくなつて來たのです。問題は、これです」

「と云ふ譯は」

「正貨の流出です」

「何故に、正貨の流出が絶えないのでしょうか」

「日本の工業資本主義が貧弱であり、世界の工業資本主義が發達し、その間に、ギャップを生ずるに至り、そのギャップは、日本の對外競争能力の減退を來すからです」

「では、日本の對外競争能力が少く、その爲めに、正貨が減少して來て、金利が騰貴して來たら、日本の財界は、餘程の悪影響を蒙るでしょうか」

「相當大きな悪影響を蒙る、と思ひます。と云ふのは、今日は、公社債株券を初めとして、總ての企業が、悉く、皆な、低金利の上に立つて居るからです。昨年から本年に互つて、金利が低下して來たので、財界は不景氣だ、と云ひ乍らも、ボロを出さないで來たんですからね。だから、その金利が、漸次、高くなつて來るとしたら、全く財界は危険状態に這入り、株價、公社債市價は更に、下落するに至るものと思はれます」

「然し、日本の金利が高くなつて來ると、外國へ放下された資本は、戻つて來たでしょうか」
「日本の財界がフラ付いて居り、諸銀行が不安状態にあり、有價證券市場も低落傾向にあるとしたら、金利高位では、中々、資本の流入も期待出來ないでせう」

「さうすると、證券類も、悲觀の外ありませんね」

「さうです、證券類は、勿論のこと、商品類も、更に、低落の外ないでしょう。現に、大正三年七月を百とした指數で見ると、東京は一三九・六、倫敦は一一四・九、紐育は一一九・七でありまして、日本は英米に比すると、物價の下落率は、遙かに、少いのですからね。世人は、舊平價で解禁したから、物價が低落して困つて居る、と云ひますが、而も、尙ほ、日本の物價低落は、英米の物價下落率に及ばないではありませんか。尤も日本が、舊平價の解禁を行つてからは、日本の物價の下落率は歐米の夫に比較して大となつたことは事實です。現に、左表を見ても、夫は分ります。

日	本年一月	本年八月	差引下落
本	一六〇・二	一三九・六	二〇・五

英	一三〇・〇	一一四・九	一五・一
米	一三二・二	一一九・七	一二・五

だが、それにしても、解禁後の、物價下落率は、英米に比較して、必ずしも、激甚だとは云へないではありませんか。それなのに、日本は、こんなにもヘコ垂れて了つたんだから、これから見ても、日本の財界が、如何に、物價の下落に耐へ難いか、分るではありませんか」

「なるほど」

「實際、日本の財界位、物價の下落にもろいものはありませんよ。米國の財界などは、生産費引下の餘力が大だからして、物價が少し位下落して來たとて、それほど、こたへないのだが、日本の財界と來たら、原價引下力が少ないので、物價の下落が非常に利くんです。敢て、物價のみではない。株價の下落も、大變に利くし、金利の騰貴は、更に、大なる打撃を我が財界に與へるでせう。だからことです」

「なるほど」

「處が、日本では、物價の下落や、公社債の下落や、株價の下落や、金利の騰貴やが、單に、

一般財界、一般企業界に、普通以上の大打撃を與へるのみではなく、更に、進んで、財界の中心をなす金融界に、非常な悪影響を與へるんです」

「その理由は」

「夫は、詰り、日本の金融界が、金融制度の濫用で、不健全な膨脹状態にあるからなんです」
「なるほど」

「殊に、これからの金融引緊金利騰貴は、財界自體の生理作用から自然に来るものでなく、正貨の流出、兌換券の收縮で、強壓的に來るので、困るんです。元來、兌換券の減少は、財界萎縮の反映である場合が多いのであつて、今日でもさうした傾向が多分にあります。そしてその意味での兌換券の減少ならば大した問題ではないのですか、正貨の流出に依る兌換券の收縮は財界に壓迫を加へ勝ちですから、斯る兌換券の收縮作用が起ると、どうも問題ですね」

「近頃は、どうでしょうか」

「まだ、さうまで切迫した兌換券の收縮作用は見られませんが、然し、兌換券が收縮して來ると、市中銀行の預金高も減少して來るのですから市中銀行の貸出が固定化して居る今日では、

勢ひ、市中銀行の貸出の回收率が少いからして、從て、市中銀行が苦しくなり、金融が硬塞し金利が騰貴する。公社債が下落する。それが困るのです」

「なるほど。さうすると結局日本財界の前途も餘り感心したものではない譯ですね」

「さうです。具體的に、日本の財界の大勢を達觀するならば、遺憾ながら、行詰状態にあるね。詰り、八方塞りさ。だから、もがけばもがくほど、いよく日本の財界は、自己矛盾をハッキリさせるに過ぎないのだ」

「なるほど」

「頭を冷靜にして考へて見給へ。昭和二年、昭和三年、昭和四年、昭和五年と、記憶を辿つて見るならば、日本の財界は、一步一步、行詰をハッキリさせ、自己矛盾を曝露せるに過ぎなかつたではないですか。私は、昭和四年は財界萎縮の年、昭和五年は財界恐慌の年、と考へたのですが、結局、私にした處で、今から考へて見ると、日本財界行詰の必然性を、おほろけ乍らに、感じつゝあつた、と云へると思ひます」

「では、日本の財界は、益々行詰つて、破裂するのですか」

「處が、私は、さうは思はない。蓋し、財界は、如何に行詰つたにしても、内面からの行詰では破裂しないものだからです。問題は外壓です。財界に對する外壓が激しくなると、或は、財界は潰れるかも知れないが、行詰つただけでは、財界は潰れるものではありません。自から行詰れば、自から通ずるものですからね」

「では、窮すれば通ずるで、行詰つたつて、財界は潰れるものではなく、外壓の力に依つて、財界は或は潰れると云ふのですね」

「さうです。現に、獨逸の財界を見てもさうではありませんか。財界が行詰れば、御破算を行つて、再び、立直つて來たではありませんか。だからして、第三期論者の云ふやうに、財界は行詰つたからつて、決して、潰れてなくなるものではないのですが、然し、困るのは、不安定化なんです。財界が行詰つて來ると、財界は、不安定化して來るので困るのですね」

「なるほど」

「だから、私は、日本の財界は、一刻も早く、肩替運動を徹底的にやつて、財界の行詰を一掃し、以て財界の不安定を除去してへ、と云ふのだが、然し個別的利害關係に囚はれて居る財

界人のことだからして、中々、未然に、自ら進んで、對策を講じ、財界行詰を一掃しようとしてない。そこで、自然は、己むを得ず、財界恐慌とか財界破産とかの力に依つて四の五の云はさず、財界の荒療治をやり、財界行詰を一掃しようとする譯です。私が、この個別利害の制度を基礎とする財界では、財界恐慌又は財界破産に依らなければ、財界行詰は除去し得ない、と主張し來つた理由も、こゝにあるのです」

「なるほど、さうすると、財界行詰に對しては、對策はない、と云ふ譯です」

「對策がないと云ふ譯ではないのです。對策はいくらでもあるのです。然れども、個別利害の制度に避けられて、その對策が行はれない、と考へるのです」

「なるほど。對策はあるが、對策の實行が出来ないと云ふ譯です」

「さうです」

「實行出来ない對策は、眞の對策ではないとすると、結局、對策はないと云ふことになります」

「さうです。然し、對策はない、と言ひ切つて了ふと、反對論が多いから、それで、私は、一應、對策はあるけれども、然し、その對策は、中々、實行が困難だから、實際上は、財界行詰

は、對策に依つて一掃されないで、財界恐慌とか、財界破産などの出現に依つて、初めて、財界行詰は、一掃されることになる、と考へるのです」

「なるほど。然し、財界恐慌や財界破産が出ると、何故に、財界行詰は一掃されるんですかね」

「蓋し、財界恐慌は肩替運動を促進しますし、財界破産は通貨價值を只にすることに依つて、舊來の債權關係を棒引すると同一の結果を來すに至るからです」

「では、財界恐慌は肩替運動を促進し、財界破産は債權棒引を來す、と斯う云ふのですか」

「さうです」

「若し、財界恐慌が出ても肩替運動が充分に行はれなかつたらどうなんですか」

「その時には、また、時を措いて、再び、財界恐慌が出現します。斯くて、肩替が徹底するまでは、財界恐慌は、何度でも、時を措いて、屢々、財界に訪づれ、結局、財界行詰を一掃しなければ措かないでしょう」

「一體、財界行詰は、何故に、生ずるに至るのですか」

「資本主義は、自己矛盾を含む制度であつて、發達するにつれて、その自己矛盾が曝露され、資本主義の不統一がハッキリして來るからです」

「資本主義の自己矛盾とは何ですか」

「資本主義の自己矛盾と云ふのは、資本主義が個別的利害關係の上に立つ、と云ふことです。資本主義制度に限らず、苟も、人類の集團を支配する制度は必ずや、全體性を持たなければならぬものであるのにも不拘、資本主義制度は、その個別的利害制度なる本質の爲めに、肝心の全體性を持ち得ないのです、だからして、資本主義制度は、發展するにつれて、全體的しめくまりを失ひ、こゝに、無政府状態を曝露するに至るのです。それが、即ち資本主義の行詰なるものでありまして、斯る行詰は、必然に、また、恐慌なり、破産なりを惹起し、夫に依つて資本主義は、自己清算を行ひ、再び、全體性を取り戻して、發展の過程を辿り始めるのです」

「なるほど」

「然し、資本主義は、發展するにつれて、再び、また、無政府状態を曝露するからして、そこで、また行詰となり、恐慌となり、破産を來し、肩替を行ひ、債權の棒引を行ひ、以て、自己清

算を濟ませるのであります。さうすると、再び、資本主義は發達の過程に突進むことが出来るのであります」

「なるほど」

「だからして、資本主義は、不完全な全體性の上立つて居る制度だ、と云ふことが出来るでせう。その點から見て、資本主義制度は、絶對の安定性を持たない制度だ、と云へます。然しまた、一面から見ますと、絶對の安定性を缺く制度なればこそ、資本主義制度は、恐慌の山を越えたり、破産の谷を越えたりして、それからそれへと、轉化し得るものである、とも云へます。現に、資本主義制度は、その第一期は、商業資本主義制度であつたが、それは、恐慌を通つて、遂に、工業資本主義制度となり、この工業資本主義も、最近は、恐慌、又は、破産を通じて、金融資本主義制度に轉化せんとして、あるのを見るではありませんか」

「なるほど」

「だからして、私は、資本主義制度には、發展と行詰と恐慌破産との三者は、本質的な存在であつて、従つて、資本主義財界が行詰つたからつて、夫を、異常現象の如く考へてさわぐ必要

は何もないと思ふのです。恐慌や破産に就ても、同一のことが云へるのです。資本主義制度そのものが安定性の不完全なものである以上、恐慌や破産を異常現象だなどと思ふのが間違つて居ると思ひます」

「なるほど」

「尤も、同じ資本主義にしても、商業資本主義時代から工業資本主義時代への過渡時代は、行詰にしても、恐慌にしても、軽いからして、世人は、知らぬ間に、夫を、パスして了つた譯だが、その反對に、工業資本主義時代から金融資本主義時代への過渡時代は、行詰の程度が深大であり、従つて、また、恐慌破産の程度も深大だから、兎角、世間の注意を惹き、物議をかもし易くもあるのだが、然し、達觀の士は、超越的態度を以て、高所から、統一的に觀察をするからして、必ずしも、第三期論者の如く、異常現象扱ひにして喧しく云はないのである。來る可きものが當然やつて來た、と考へるのみであります」

「なるほど」

「だからして、冷靜に考へると、結局、日本の財界も、今や、當に、無政府状態からして、自

己統一のある状態へと赴かんとするその過渡的橋梁を通過しつゝあるのであつて、その橋梁を名附けて、或は、財界恐慌と云ひ、或は、財界破産と云ひ、或は、財界肩替運動と云ひ、或は、債權棒引運動と云ひ、或は、財界淨化作用と云ひ、或は、財界自己清算時代と云ふに過ぎないのです」

「なるほど」

「だから、まア、餘り、慌てないで、斯うした過渡時代を見逃して、早く、先廻りするのが、一番得策であり、夫が、眞に達觀の士でもあるのです」

「では、どうしても、日本の財界は、恐慌か破産がなくては、行詰を一掃して立直に向ふことは出来ないのですね」

「さうです、絶対に出来ないのです」

「果して、さうでしようか」

「それは、日本の財界の八方塞りの傾向から見ても分るではありませんか。日本の財界は、再三、申上げたやうに、固定資本の壓迫と、借金の重壓と、購買力の減少と、財政バランスの逆

化とで、全く、どうにもかうにも出来なくなつて了つたんですからね」

「なるほど」

「だから、結局、日本の財界も、徹底的に整理しなければ、浮び上れないのです。他言すれば恐慌か破産かでもつて行詰を一掃することです。誰が何と云つても、日本財界の前途には、斯うしたことが横つて居ると思ふ」

「それなら、新平價でもやつたらどうか」

「財界破産で、爲替相場が暴落した後なら知らぬこと、それ以前には、麻の如く亂れた今日の簡別利害制度の世の中では、新平價なんぞは、效果の如何に不拘、實行出来ないから駄目です」

「では、膨脹政策を探つたらどうですか」

「それも駄目です。世界が、皆な、擧つて、收縮政策を探つて居る今日では、日本獨りが、膨脹政策を探ることは、それこそ、飛んで火に入る夏の蟲で、世界の工業戦争の喰物に、日本の財界を提供するやうなものだから、駄目です」

「なるほど」

「一體、日本人は、工業資本主義の時代に目醒めないから困るんです。商業資本主義は市價經濟で、高く賣ることを主眼としたからして、膨脹政策も可であつたのだが、今日の世の中は、工業資本主義の世の中で、原價を引下げて競争する時代なんだから、膨脹政策はなる可く避けないと損なんです。また、一步を譲つて、日本が財界行詰に耐え兼ねて、膨脹政策を採用しようとした處で、已に今日の如く、財界が收縮化し、民間が貧弱化して來ては、中々普通の手段では膨脹政策の資源を收得することは困難なるを如何にせんやです」

「非常手段に訴へたらいいではありませんか」

「今日の様な政黨政治の下にあつては、餘程の重大事件が発生してからでなければ、如何に政友會の内閣が出來たからつて、非常手段で、膨脹政策の財源を作ることとは出來ないから、駄目です」

「なるほど」

「世人は、餘り政黨に信頼し過ぎますよ。今の政黨に何が出来るものですか。思ひ切つた事前策が、今の政黨内閣に出来る、と思ふのが、間違ですよ。政友會内閣になつて見た處で、大し

た膨脹政策は出來つこがありませんし、若しも、公債の増發で、膨脹政策の費用を作るやうなことをすれば、公債市價の暴落からして、金融資本家が非常な痛手を受けるから、株價も低落しようし、財界も悪化するであらうから、それこそ、膨脹政策を何の爲めに行ふのか譯が分らなくなります。と云つて、國民の納税力は、已に、非常な減退なんですからして、結局、政友内閣になつた處で、金のかゝる膨脹政策は、一切、行はれない譯だ」

「金のかゝらない膨脹政策と云ふものがありますか」

「ありますね。例へば、金融制度の改善などは夫です」

「なるほど」

「詰り、財界組織の改善です」

「では、夫をやつたらどうですか」

「私は、これが、まア、残されたる唯一の方策だと思ふのですが、夫も、中々實行困難です」

「どう云ふ譯ですか」

「詰り、利害關係の箇別性に差障りがあるからです。日銀制度の改善にせよ、市中銀行制度の

改善にせよ、企業統制組織の發達にせよ、皆な、それづくに利害關係の箇別性に引つか、つて中々、實行が困難を極めるのです。また、實行の容易な組織改善ならば、利害關係に餘り影響のないものに相違ないからして、そんなものを、いくらやつても、夫に依つて、財界の行詰が一扫されると云ふ譯には行きません。財界の行詰を一扫するに足る程の財界組織の變革ならば、必ずや、利害關係の箇別性に觸れるからして、さうした財界組織の變革を行はうとする、その以前に、財界の方が先廻して、恐慌化して了ふので困るのです」

「では、一番無難なのは、公債増發で膨脹政策をやることですね」

「處が、已に一言しましたやうに、公債増發でもしようものなら、公債市價が下落してくるから困るのです」

「日銀や政府が増發した公債を抱き込めばよいではないか」

「その程度には限りがあるし、そんなことをすれば、矢張り、公債の信用が減じますからね。殊に、預金の減少につれて、市中銀行も、これからは、ボチ、ボチ、公債を手放すかも知れないに於てをやです」

「公債市價が下落することは、財界にとつて、悪い影響を與へますか」

「悪い影響を與へるところではありませんよ。現に、某大金融業者の如きは、日本の財界を支へて居る唯一の力は、公債相場なんだから、その公債相場が下落でもして來ようものならば、日本の財界は、暗になる、とまで考へて居る程なんですからね」

「では、政府の財政は窮乏して居るし、公債政策も行詰つて居るし、財界は、更に、固定資本と、借金と富減少と、購買力減少とで行詰つて居るとすれば、いよく日本の財界も、恐慌か破産の外ない譯ですね」

「結局は、そこへ行くのでせう。現在、日本の財界に、彈力があつて、財界が悪化してくると、夫に應じて、整理され得るやうだといふのだが、モウすつかり、日本の財界には彈力が失くなつて仕舞つて、財界が悪化しても、一向に、財界の整理は出來ないので、結局、財界も古ゴム見たいにバンクの外ないでせうよ」

「なるほど」

「世人は、政府の積極政策を問題にして居るやうだが、積極政策の餘地があるやうなら問題は

ないのですよ。積極政策も、結局は、金ですからね。その金がなくては、積極政策も始まらないではありませんか」

「では、一體、どうなるのですか。昭和六年は財界恐慌ですか」

「財界恐慌かどうか知らぬが、少くとも、財界行詰が、モツと、ハッキリして来ることは事實でせうね」

「恐慌回避策はどうですか」

「恐慌回避策は、株式市場が悪化してくるやうだと、極力、行はれるでせうが、その程度たるや、知れたものなだから、恐慌回避策で株價を永く釣上げることは困難でせう」

「では、株價の反騰も、結局は、一時的ですか」

「勿論、さうでせう」

「では、將來、株價は、再び、くづれてくるのですか」

「勿論、崩れてくるでせう。然し、株價が、十月九日の安値を下廻るのには、餘程の悪材料を必要とすることは、吾々の一考す可き處でせう。今度、若し、株價が、十月九日の安値を下廻

つて、ドン／＼崩れる場合は、蓋し、財界恐慌なんですからね。株價が、無暗に安くなると財界の底が破れてくるからして、却つて、財界の方からして、株價を引上げて、底を破られないやうにする自然の生理作用が、財界そのものゝ中に、起るものですから、財界が悲觀す可きであると云つたからつて、株界をも同じ様に悲觀するのはどうかと思ひますね」

「なるほど」

「財界は、トコトン、悲觀してもよいが、同じやうに、株價までも悲觀すると、ヒドイ目に遭ひますよ」

「なぜ、さう云ふことになるのですか」

「蓋し、證券資本主義の現代では、株價の下落は、國富の減少で、従て、株價は、財界の値打の現はれ、とも解されるものだからです」

「株價が、財界の評價作用なら、何故、株價は、或る程度以下には下落しないのです」

「このことは、無配株にも、十圓とか、二十圓とかの市價があるのを見ても分るではありませんか。丁度、理窟は、これと同じであつて、財界が行詰つて、無配財界となつたとしたとして

も、株價は、現在の財界の評價たることを止めて、將來の財界に望みを屬し、將來の財界を評價し出すでしようから、従つて、株價は、財界惡化と、或る程度までは、運命を共にして下落するか、或る程度以下は、財界が惡化しても、株價は下落しないことになるのです」

「では、現在の株價の地位はどうでせうか。現在の株價は、無配財界を現すほどの低位まで、來て居りましようか。十月九日の安値は、その地位に當るのでせうか」

「當りません」

「その理由は」

「蓋し、十月九日の株價は、まだく、政府の財界救済とか、會社の蝸配行爲などに依つて、假裝されたるものだからです」

「では、將來は、モウ一度、十月九日の安値を下廻る時期が來るのですか」

「財界行詰の傾向と、夫を支へる政策力の薄弱とを考へるとさうならぬとも云へませんね。殊に十二月の末からして、議會が開かれると、政爭からして、どんなアラが暴露されるかも知れないし、濱口首相が、將來とも、首相たる健康を恢復し得られないとすると、民政黨内閣に、

仲間割れが出來たりして、夫をキツカケに、政局が不安化することも、考へられる事實だからです。だからして、今日の相場は、十月九日の安値が、當分の底値だ、と云ふ一安心と、政府の恐慌回避策の實施（又は政府の政策轉換）が見越されて居ること、更に、また、商品界に中間の底入傾向が考へられることによるその支へが、信用を失へば、その時には、一先づ、下押す段取りとならざるを得ないのではなうでせうか。だから、私は、目先、今回の相場が、大いに高くなつても、新東の百十圓をこく、だ、と考へた譯なんです」

「では、詰り、大勢觀としては、來年は、財界行詰の年で、或は、財界恐慌が來るかも知れませんが、財界が惡化しても、或る程度以上には、株價は下らないものだ、と云ふ譯です。また、今日の株價は、地位が高過ぎるからして、目先、多少高い處があるにしても、議會接近時分からは、餘り、株價の樂觀は出來ない。但し、財界恐慌で、株價が慘落した處は、絶対に、買ひだ、と云ふ譯です」

「まア、大まかに云へば、そんな處ではないのですか。然し、來年は、一方には、財界行詰、財界恐慌の年であるとしても、株價の地位が、已に、低下して居ることであるから、政府の對

策と相俟つて、案外、波瀾の多い年で、従つて、本年のやうに、來年は、一本調子の悲觀は不可だ、と思ふのです。本年に比較すると、來年は、寧ろ、底迷底這ひの年であつて、従つて放資家は、なる可く、玉石選擇の態度を探り、合理的な悲觀をす可きだ、と考へられてゐるのです。

財界は何うなる終

昭和五年十二月十五日印刷
昭和五年十二月二十日發行

財界はどうなる奥付
定價壹圓五拾錢

著者 勝田貞次

發行者 東京市麴町區九ノ内二ノ一八 鈴木貞貞

印刷者 東京市小石川區久堅町一〇八 島 潔



發行所

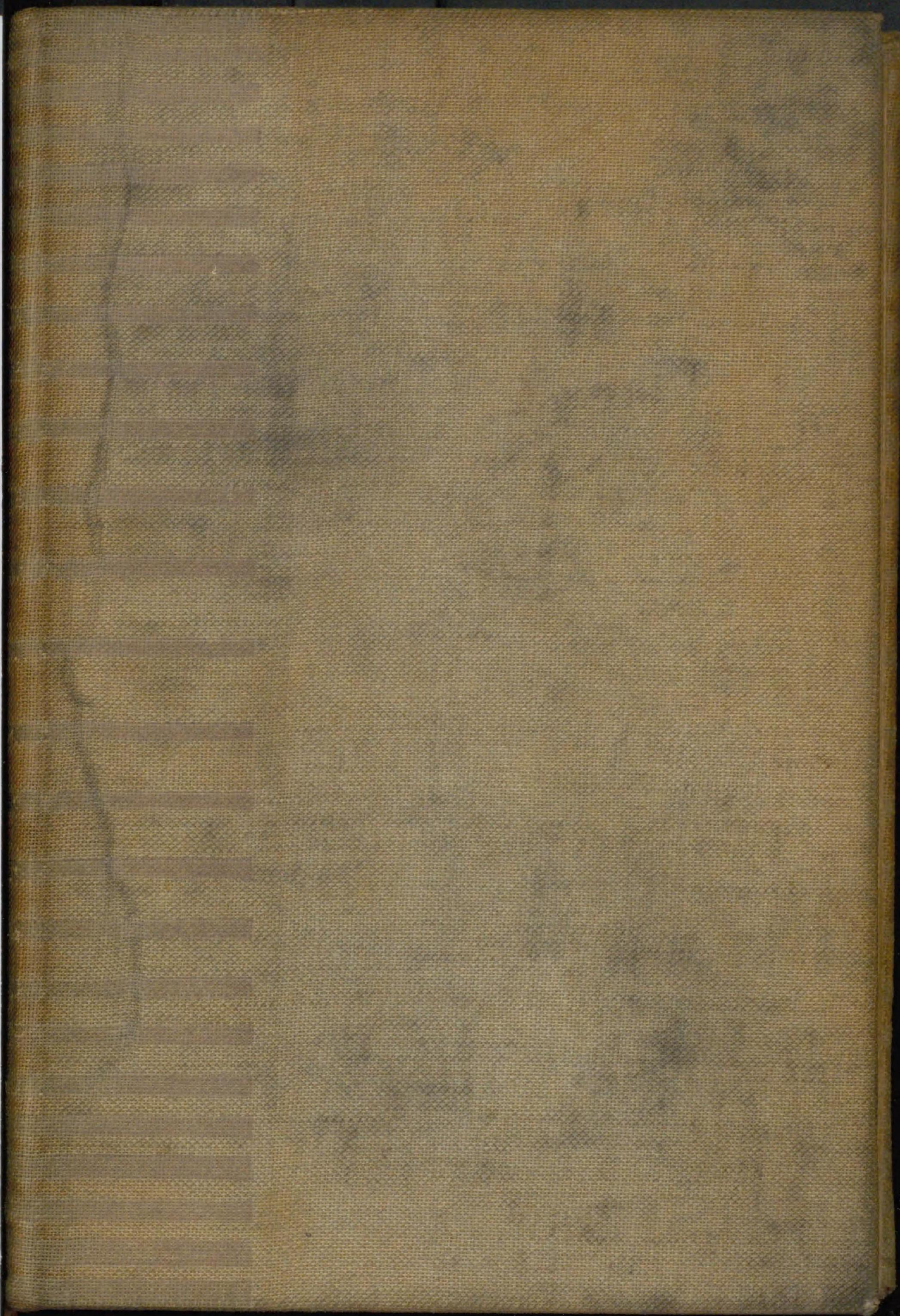
東京・丸ノ内・昭和ビル
株式會社 日本評論社

電話九ノ内(23)自四一三三
振替東京一六

607
220

68 年 / 月 / 日

調查濟

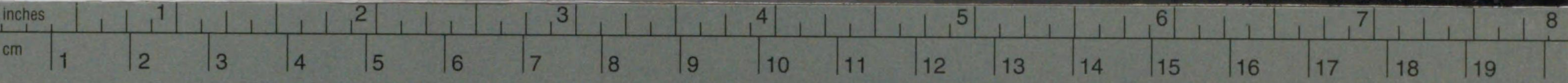


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

